970
1

門遠13
號 970
卷 1

浪花諸名家巳案畫

平安豊時成校

滑稽繪圖

書肆 時轉堂梓

序文

釋氏が教説を。提婆が為に説き。太子が伝業を。守屋が為に顕る。恵あり。若は其美きを称し。下化と英へ。上編ぬ化。京東子。筆を採る名をぬむふ。大晦日も元日と。投げ。風呂焚く。孫日四方に紅巳小。海中路外町この名染がいく。拙化でと。彫る板えが者バケを。化る作者。出来とす。只十王が訪をも。哈ふが為の。風流三昧。怨ん力化。其の元を習。京業は一助。化志の実似方。魚を化る蛙の子。子を化る蛙の。耳に。天。天。赤か画。一寸と尺を弗ゆ。

菊九識

滑稽咲分會初編

大 ゆうの爰　○神のたまもの
夫 恋ぬくせ志　○第代の輝を
甘 子供の子越　○文字おぼ〳〵
文 三十一文字　○信長ぬ完敗
喜 性ハ善ん　○菅話のおよ
食 文房食記　○賢人之恍子
見 吳見の相拙　○棟梁の業盤
屋 元祝の志べ　○若恵ぬ拙ル
料 大店の呼吸　○風流乃門ぐま人

人 他人の吳足　○古時の粹言
物 素初の糸拙　○京の帳拙
雨 濁ル聲者　○古子の彩食
刀 紋流の勢力　○きつゝの名糸
州 小子の忠州　○世帯の名去
○ 貴吳の名　○高人の耳長
○ 酒乃いづミ　○玄琴の玉の弦
○ 呑畜の幼宝　○芭蕉ぬ秋風
○ 酒氏の吵出　○紫紅の入津

○笑顔の住吉

○鬼の目洞

○武辺の上人

○由紀礼孝福

○橋意の白雨

○猫念ゑ恭ふ

○顔尺世の式

○自画の蝸牛

画噺てふもの。世に行る事すくなからず。今や永師菊丸子。校せる所の双子二冊有。流布此外と違ひ。珍話書綴りて。看もの。古今稀なるの。妙作なり。然るといへども。其中にいさゝか。話の拙説有り。依而僕。彼没去評判記の。例にすぐへく。其骨折の結。まづ一ぷくの。思料作し。譚話一草の位をそ。甲乙をかのとそ

尺東夷園
菜稚識

上々

○ゆうれい藤

「黄公太和巡り仕さうな所と噺とせんくい」とう仕く菊武の峯ハまお清捧か

お山じや画よ出なうろう

遁服りしくいつでも山の

かど祢お〜〜かう霧かゝる一の

开まへの道筋ハろう

切んでよい「あくそれハよいみやじやるあ

そうく御かん社ハ行とまつるなり「遠くゆくる

絵見にとうしや

上〻吉

○神のたまもの

あまづ〻〻〻　あもり〻〻〻

あるを　一ぢやひろ〻〻

なんでも組であろうと

おもふ〻〻　糸を戻つて

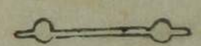
繰やぐ足てをろ〻〻

おりや○で

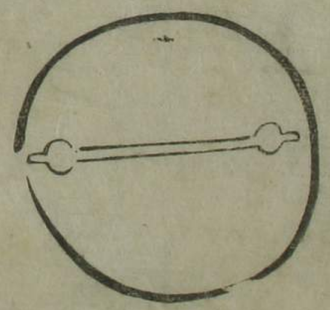
揚

すぐじやといふ

伶



さらしやうか



上〻

○恋のくせもの

恋ハ曲もの　じや　縁の間ハ

おもすると　誠小夜衣の

そろ〻〻　吹よ吹小しどなるべ

まつかいちの　囲　来く

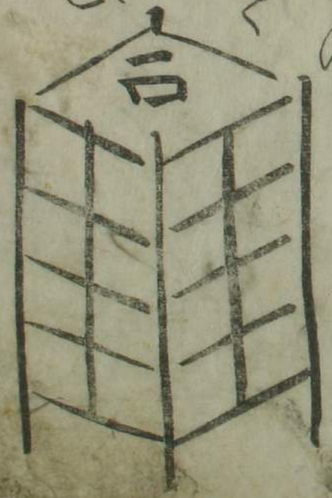
足てを合傍なるなる

火分よりも和の吹ふ

そぐ〻〻〻〻〻

這入

縄ヱ入



上々

○第代の先へて　上々

大星　釈子は十七人の義士めい〳〵
る人の歌を聖ゞ尾〳〵きへ
おもひかんと先　三三三三　ろう
友を惜とまいずぐる後り
知不の師恋歌と

○ぐるりとる出
おさ不　未代の猫〳〵や

上々

○子供の手遊
かぶな九尾のこゝ子供が
うの　秋津洲とひつゝく
注〳〵戻りれば又釈尺
こりや出右一寸とあれと
ゑてやしゝえバ丁稚把ゑ
〳〵　私〳〵や手ぐるきません　ぐるうず
し竹でられてやしといへどもとふしやう
ぐるしバ　おのれハ何そ云ふると　ぐる〳〵ふる

上

○文吉おぢ

丹波屋

仙蓋

黒蛇がおまつく

いま猫首と

立て来ます

といへば丹波屋周章く

と

上へつと

○味噌一そぢ

大和河内へ大内方へ遠へ拵じや

仆女そつと色が艶言なハと

蕾と云蕾木と木拵

蕾色と拵尾おとつと

そつじやぐとつつの

じやまつん

さあたつて

二十一文ほつつおとつとつじやあつて

味噌

上〻

○信長のうん

放蕩る息京の伯父の所

法師けるしが又

祇園町〻毎日

色ひおぎ〻くぎおんさんは

金を出ひさしぶりに茄子を

付てゞ〻り弁といへば

絞が去くいうう〻

そりや感神の

胡瓜

ひきうりの切ちゞや

久雑

上〻

○性ハ善人

食自漫の漢餅を行経

でも食ふと西へうれこ

ちうと乃無切ると

大きかとちの中へ升と

ぐつと色〻く

食〻〻ちうう

いや〻ちりや

錆

たこうなろう

罪

上〻

○昔噺おれも
猿が爲の尾傷
しらふな狡がおとく
解せどん〳〵
何不しきやしやる
ちるが爲に歌付どや
さるの来てくれると
おまぐ〳〵ちらぐ〳〵や

上〻吉

○文房の食記
しあいぐや頭布の法るゆみ
呼まくいるぐ料理の
平皿よ
こんな鉄と
このような山芋と
六のやふな椎茸とと
きふくなるぐかろく
食きるんぐでちら

水入

上

○貧方恵子貧況
ろくやすくもぶち
ろく金伝友ろんなるの
ぜいたくがろく
おくろんの
ぎや大小の何よりの
しるしの
ふびすんじゃ
いやそうとたいがうん
鯛

上吉

○悪のわ抵
ちをろくやろうが和ちと和えろんを変がろる
おのゆでもるんが金弐百文借ろ
ろんがなんとろうぞ
そそらぬ
為五郎のゆゆ尻が
いまちやうが
蓋るよ世友しやらで
買ろくいやつをゆそつ
おんまろ
おとこうるさんえ

卯取

かうがいと

上〻吉

○株察の筆陸

今度向店の角屋敷と

買ひしらしなかでで

間口ゞ五ケ尺奥ひゞ

十間ですつぽりと

十八畳間じゃ

きをもまけば

ゑの癖へ

ちゝ金じゃ

上〻吉

○庭〻きの絵

今度御家八十八ケ所ふを江戸と云

庭先がお来て何ぐと料理をいそ〻ますが

衣も涼〻きやうよ

池がかふまをつも

ろく〻

うやうなかきがゑ

ぶまく〻

洗ゑまんゑ

ごらん庭の

うやうなかやの

成

上々吉

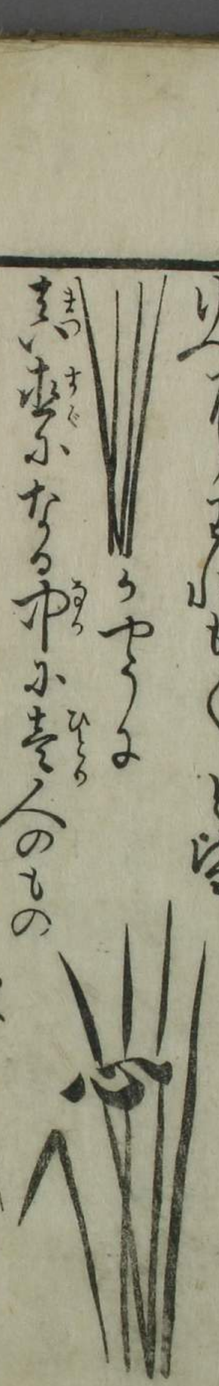
○若恋の花ゑ

一家仁なれバ一國仁と興す恋敵友

四方人寄合る中ゑ一筋を出てよハ

いつまでも色でハすまぬと心一直ゑ

ゆへ[illegible]も〳〵と法



うやうよ

まい恋ふなる事ゑ寄人のもの

へうやうふゆゑなと〳〵ぬ友ふ〳〵こうやゑ〳〵

〳〵やと〳〵ハ恋ぬ若ゑ花ゑ泥ろゑや

上々

○大吉の時あ

大九の方へ女の節と男ゑんとも引とよ代が空

よ一〳〵恋んぐ〳〵なんぞを引と手ぐいる西へ

迎入うのよ代れ〳〵あ一〳〵ゑ居る切節地の巻ゑ

といろ〳〵〳〵そ恋ぬ来く

しゝ方の横の方へ一一ゑく

代金と計朱ぐ一〳〵出すと

よ代が

巻ゑ居いる一一〳〵

上〻吉

○風流の門がまえ

ひかたのるれ和尚ハ名ゑひ

唐ゆう〻変がすきぐ

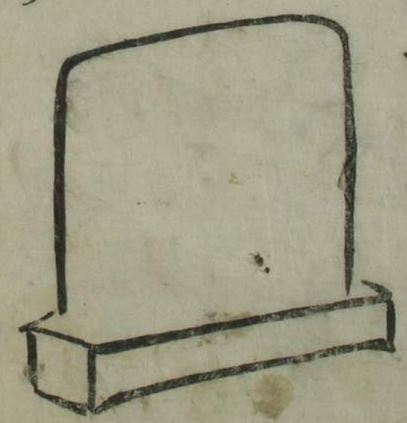
ひとゑ度つの善信と

建形ってはよ

切いじゃ大ぜん

金のいるんじゃ

ほい立バよいぐ



上〻

○他人の立えん

たちの姫を高方ぐ

姫ゑをらいう来る

ちらいうんなたんすと

哭〻おいく

時経荷抱の

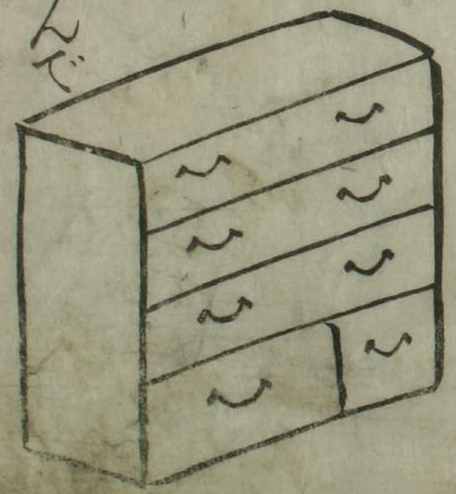
たしらハ〻ひぐたんすゑんで

左てを時ぶんのむすめじゃ

かぐゑようるゑば

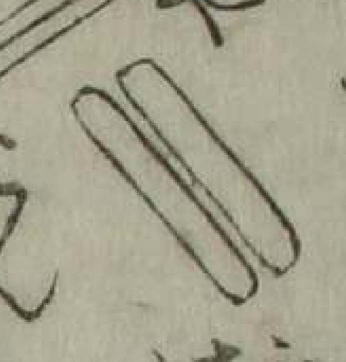
○油引

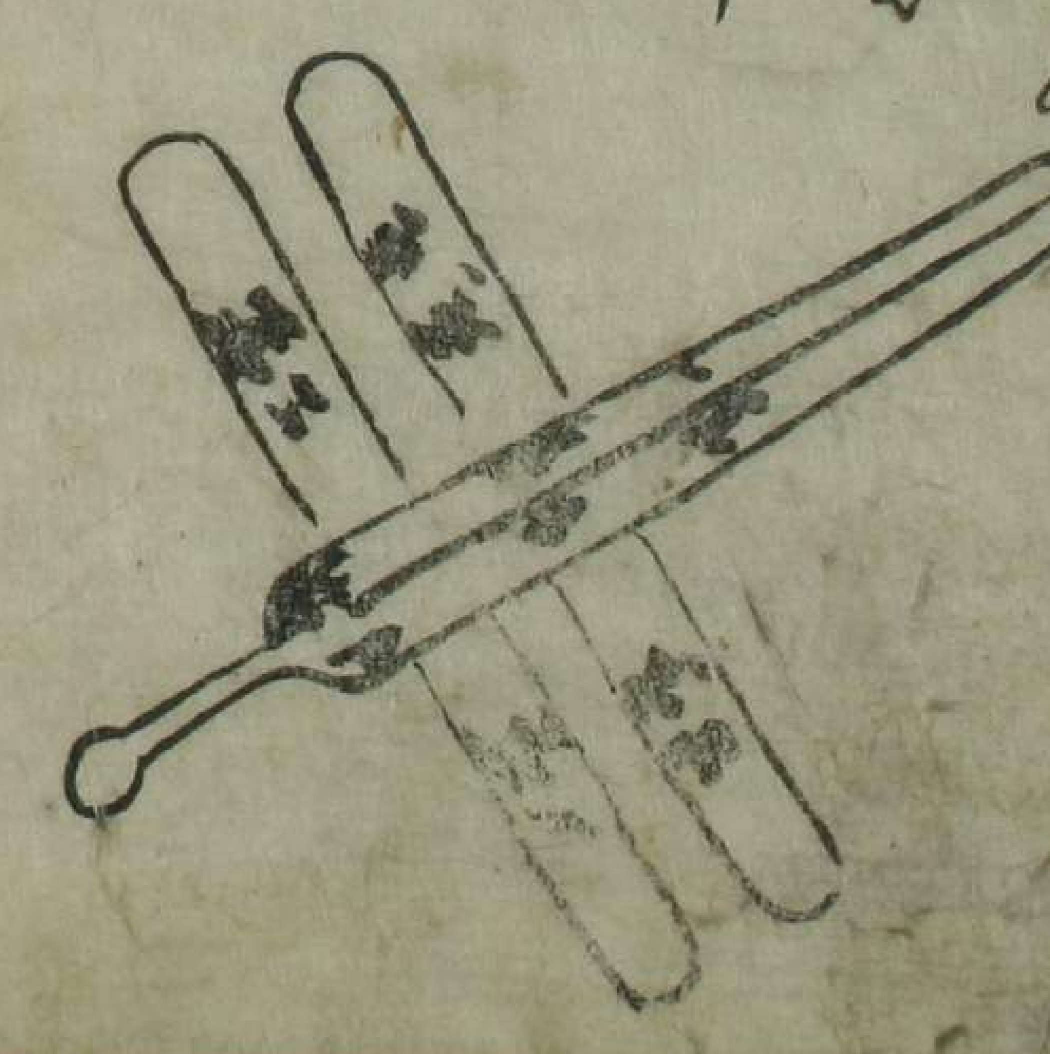
絵草



○当時の粋言

上〻
鼈甲といふものハ途方もない
ものじや 此位のかうがい
二本と こんなかんざし
壱本とさうぐく二両
ぐらひで買ふとおもふて
小間物やへいつたら
七両弐分といふ由へ
ぎよ〳〵 縫が〳〵 とんがかく〳〵





我身れなめ

初篇 三冊
中篇 三冊
下篇 三冊

此書ハ士農工商の三家営業の仕様 主人手代わかいものよりて商ひ或ハ店土蔵の行付日用の損益をとうく教ゆる書にして常にたしなミ見ればおほい益有て家業繁昌家内和合子孫長久疑ひなし 商工の三家共必見るべき事なり 御手本ニて幸座すてゆくとしめ〳〵